

■**莅戸太華(善政)** 藩政家、米沢藩士。藩主上杉鷹山の施策を実質的に推進、サバイバル書「かてもの」ほか膨大な著作。
のぞきどたいか
昆陽蕃蕃考・1735＝ 米沢藩馬廻組莅戸平八の長男に生まれる。安原伝左衛門の妻を乳母として育てられ、

・・・・・・1740＝ 5歳：父が死去したため、実家に戻り、以後、祖父政共に厳しく育てられ、

梅岩没・・・1744＝ **9歳**：
徳川吉宗隠居1745＝10歳：
菅原伝授十・1746＝11歳：この年、藩主上杉宗房が死去して、重定に代る。

徳川吉宗没・1751＝16歳：上杉治憲誕生の年、祖父の隠退によって、家督を相続。御中之組に入り平番の筆頭を命じられる。

薩摩藩工事・1753＝**18歳**：

・・・・・・1756＝21歳：祖父が死去。
源内物産会・1757＝22歳：藩主重定の赤湯湯治にお供、
宝暦事件・・・1758＝23歳：母が死去。藩主重定の江戸出府にお供し、
大式政治批判1759＝24歳：帰国にもお供。
大岡忠光没・1760＝25歳：嫡男八郎が誕生。

・・・・・・1762＝**27歳**：藩主重定の江戸出府にお供し、
・・・・・・1763＝28歳：帰国にもお供。
加賀千代句集1764＝29歳：次男が誕生。

忠臣蔵大当り1766＝31歳：藩主の世子となった上杉治憲のお供として江戸滞留を命じられ、
明和事件・・・1767＝32歳：***重定の隠退で、藩主となった上杉治憲により、小姓に取り立てられる。治憲が大倭約の令を発したことが、巷で自分の所為とされていることに、病と称して退役を願うと、**
久留米藩工事1768＝33歳：留められた上、和歌贈答をもって米沢に送り出され、
・・・・・・1769＝34歳：三男が誕生。町奉行に昇進。
・・・・・・1770＝35歳：備杣の原案として「義倉篇」を奏上。
御蔭参流行・1771＝**36歳**：「地獄戻」を著し嫡男八郎に与える。町家の備杣策を講じるなどして、藩主治憲の信頼が一層篤くなり、
田沼意次老中1772＝37歳：小姓頭に昇格するとともに、再び江戸に登って、藩主治憲の側に仕える。
大原騒動・・・1773＝38歳：長女が誕生。嫡男八郎に与える遺書を作成。「予定篇」を編み、「勸学篇」を奏上。
解体新書・・・1774＝39歳：教訓いろは短歌を作り下男庄八に与える。「白家篇」を奏上。
黄表紙始・・・1775＝40歳：藩主治憲の帰国、赤湯湯治にお供にお供後、治憲の正室幸姫に腫れもののできたという知らせで、その確認のため、江戸へ出、幸姫全快で帰国。学館建立の命に、「学政論」を奏上。
雨月物語刊・1776＝41歳：藩主治憲の江戸出府にお供。学館完成し(與議館)と命名される。
・・・・・・1777＝42歳：藩主治憲の帰国にお供。
ツツ船蝦夷来 1778＝43歳：五男が誕生。藩主治憲の江戸出府にお供。「居懺篇」を奏上。
源内獄中死・1779＝44歳：藩主治憲の帰国にお供。
・・・・・・1780＝**45歳**：藩主治憲の江戸出府にお供。意見書「空つもり」を奏上。
・・・・・・1781＝46歳：藩主治憲の帰国にお供。病につき隠居を願うも留められる。
天明大飢饉始1782＝47歳：幸姫厄篇の報に、江戸への使者を命じられ、その死への対応。＜天明の大飢饉＞にあたり、
蘭学階梯・・・1783＝48歳：***食用となる山野草の手引書編集を建言して「飯粮集」が作成されるなど、多くの献策した結果、一揆も餓死者も出さずに済む。病により隠居を認められ、「飯粮集」を参考に、生き延びるための知恵の本「かてもの」の執筆を始めたと思われるが、**
蝦夷初調査・1785＝50歳：藩主治憲が隠居し、治広に代る。翌年にかけて、凶作・大火などが続いて、
田沼意次失脚1786＝51歳：
・・・・・・1788＝53歳：藩主治広に、「焉?篇」を献上。
初の横綱・・・1789＝**54歳**：藩財政が危機に陥り、治憲が家臣らに意見を求めて、再登場を望まれ、
混浴禁止・・・1791＝56歳：***中老という奉行を補佐する重職に任命され、再び出仕。47ヶ条にのぼる改革案を進言。**
松平定信引退1793＝58歳：
オランダ 正月・1794＝59歳：ついに最高の職奉行になる。

この間も、「かてもの」を書きつづけ、
昌平饗始・・・1797＝62歳：恩命によって、赤湯湯治。
古事記伝・・・1798＝**63歳**：

伊能測量始・1800＝65歳：「かてもの」を書き終えるもなお、取り上げた山野草の毒性などを調べ、すべてが無害と分かった後、「かてもの論語解」をつけて、
一九膝栗毛始1802＝67歳：木版印刷して、領内すべての町や村に配付。
ツツ船来航始1803＝68歳：***病没した。死に臨んでなお、見舞いにきた治憲に建白書を呈している。**
「かてもの」のあったことで、天保の大飢饉で餓死者を出さなかったばかりか、昭和の東北地方の大凶作に際しても、「かてもの」が印刷配布され、多くの命を救うことになる。